

編集の序

「先生には思いあたる疾患があるんですね！」

これは小児科を回りつくして最後に千葉大の小児神経外来を訪れたお母さんから出た言葉です。私にはこの言葉が今も忘れられません。この方の病気は発作性動作誘発性ジスキネジアといい、小児神経を診ている先生はだれもが知っている疾患ですが、残念ながら小児科医に十分認知されているとは言えません。専門医の診察によりカルバマゼピンの処方では症状は消失し、この患者さんご家族は長年のいじめと心の葛藤から解放されました。

小児神経は本来症候学の学問です。特徴的な症状から病変部位を推定し、正しい診断から治療に至ります。しかし症候学であるがゆえに、実際に見たことがなければそもそも診断に至れません。今までこの分野にはそのための教科書がありませんでした。さらに動画の教科書など小児のプライバシーの点からはもってのほかであり、何人かの医師からは協力すら断られました。それでも久保田雅也先生、小坂仁先生、榎日出夫先生、村松一洋先生の4人のエキスパートからご快諾をいただき、今回発刊にこぎつけることができました。今この本を見てもかなりの粗削りで、必ずしも正確でない記載があるかもしれません。しかし私を含め5人の小児神経科医の長年の思いと経験がここに凝縮しています。どうかその奥深さを堪能していただき、小児神経学の素晴らしさを実感していただければ幸いです。

今回の企画は、ひとえにこの書籍のビデオ収録を快く応じていただいた患者さんおよびご家族のご協力によるものです。また羊土社の鈴木美奈子さんの熱意がなければ、本書はありませんでした。週末になるとお嬢様を連れて千葉大の小児科外来に来ていただき、診察ビデオを何度も撮りなおしました。編集部の増本奈津美さんには遅れがちな原稿提出にもかかわらず、丹念に美しい紙面を作成していただきました。皆様には心より御礼申し上げます。

願わくば、この書により小児神経学を志す小児科医の輪がさらに広がり、その恩恵を受けて笑顔を取り戻す子どもとご家族が少しでも増えることを祈りつつ、編集の序といたします。

2020年3月

千葉大学ベンチャービジネスラボラトリーにて

千葉大学大学院医学研究院小児病態学
藤井克則